

## 茨木市安威0号墳から出土した鉄製品（1）

河野 正訓・清水 邦彦

### 1. はじめに

安威古墳群は三島平野を縦断して流れる安威川の西岸の丘陵一帯に位置する古墳群である。

戦後間もなく、森浩一が古墳時代前期から後期まで小規模な円墳を連綿とつくり続けた特異な古墳群として紹介したことで、注目を集めた（森1951）。

1981年、茨木市教育委員会による安威0号墳および1号墳の発掘調査がおこなわれた結果、粘土槨や銅鏡が検出され、あらためてこの古墳群の重要性が認識された。一方で、この調査については概要が示されたのみであり（奥井1982）、正式な報告書の刊行にはいたっていない。

本稿では、安威0号墳から出土した鉄製品についての報告をおこなうとともに、考察を加えることで、安威0号墳の評価に資することを目的とする。（清水）

### 2. 安威0号墳の概要

安威0号墳について、奥井1982をもとに概要をまとめておく。本古墳は直径約15m、高さ約2mの円墳である。葺石や埴輪などの外表施設は備えていない。墳頂部で、東西方向に長軸をとる2基の粘土槨が並列した状態で検出された。

南側の1号粘土槨、北側の2号粘土槨ともに西半分は攪乱によって失われていたが、両粘土槨は重複することなく、独立した墓壙となっている。また、両粘土槨は2基を一对とするような整然とした位置関係にあることから、近い時期に相次いで埋葬がなされたと推測されている（廣瀬2014）。

副葬品は、1号粘土槨からは上方作系浮彫式神獸鏡1点、鉄斧1点、鉄鎌1点、鉄鉈1点、鉄刀子1点、勾玉1点、管玉26点、小玉10数点が、2号粘土槨からは斜縁神獸鏡1点、石釧片4点、勾玉9点、管玉30点、丸玉48点、小玉76点、棗玉1点、鉄製工具類等が出土している。

古墳の築造時期については、これらの出土遺物

のうち、滑石製勾玉の出土を根拠に、古墳時代前期末から中期初頭にかけての時期が想定されている（廣瀬2014）。また、森田克行も三島地域の古墳編年を提示するなかで、安威0号墳の築造時期を前期末に位置づける（森田2006）。（清水）

### 3. 安威0号墳出土鉄製品の観察

今回、実見して図化、撮影することができた鉄製品は鉄斧2点、鉄鉈2点、鉄鎌1点である（図1、写真1）。鉄鉈の2点は明瞭な接点がないものの、形状や木質の状態からおそらく同一個体と判断する。これら農工具のうち鉄斧1は「0号墳1号粘土槨 鉄器-1」、鉄斧2は「AI 0号墳 2号粘土槨 鉄器-5」、鉄鉈は「AI 0号墳 2号粘土槨 鉄器-1」、鉄鎌は「0号墳 1号粘土槨 鉄器-4」という札が伴っている。以下、各個体の特徴について詳述する。

**鉄斧1** ほとんど欠損していないが、錆化が著しいため、形状や厚さは不明瞭である。短冊形鉄斧もしくは板状鉄斧と呼ばれる板状の斧である（以下、短冊形鉄斧と呼ぶ）。全長は12.3cm、刃縁幅4.7cm、基端幅約3.8cmであり、刃縁幅が最大となる長い台形状をなす。両刃であり、刃縁は斜めに傾く。厚さは錆化のため不明である。図の裏側（以下、裏面と呼ぶ）には木柄とは関係のない木質が錆着している。

**鉄斧2** 短冊形鉄斧である。錆化が著しいため、形状や厚さは不明瞭である。全長は11.0cm、刃縁幅2.7cm、基端幅1.5cmである。鉄斧1に比べて小型で細長い台形をなす。両刃であり、刃縁は弧を描く。厚さは錆化のため不明であるが、鉄斧1よりも厚く、正方形に近い長方形断面となる。表裏面ともに木柄に由来する木質が錆着している。

**鉄鉈** 茎部2片からなり、刃部を欠失する。残存長5.2cmと6.6cm、茎部最大幅6mm、厚さ4mmである。茎部は細長い形状であり、断面長方形をなす。裏面には木柄に由来する木質が錆着してい

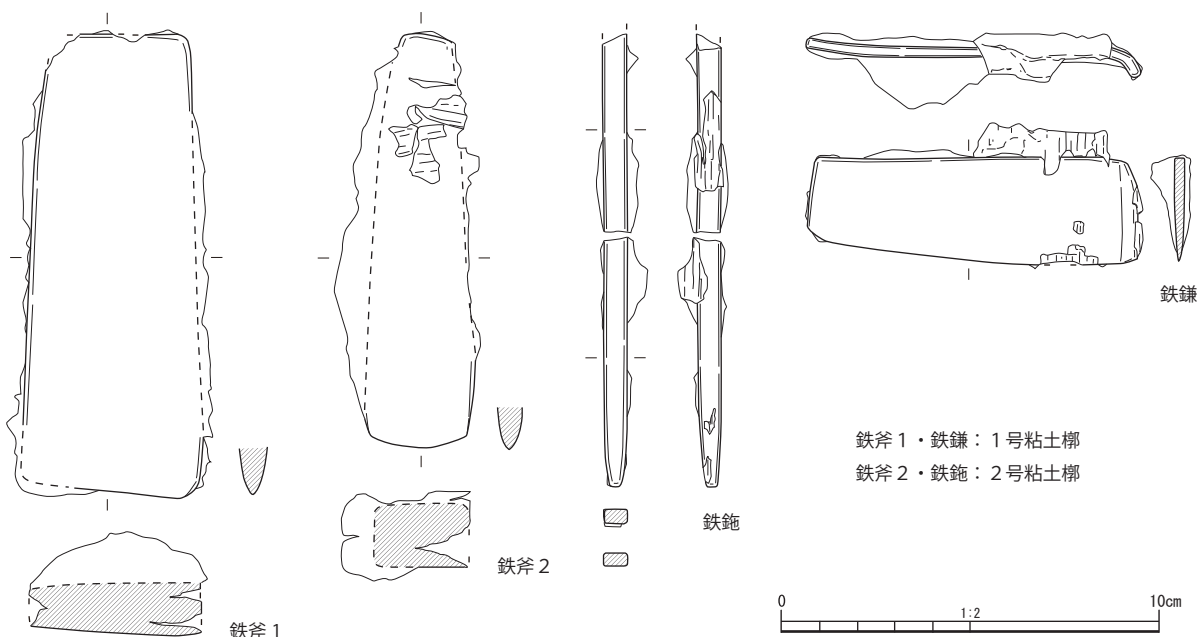


図1 安威0号墳出土の農工具

る。

**鉄鎌** 刃縁がわずかに欠損するものの、ほぼ完形の直刃鎌である。横幅 8.7 cm、縦幅 2.8 cm、厚さ 3 mm である。背・刃ともに直線的である。刃縁はわずかに外側に傾き、基端付近から先端の刃先にいくに従い徐々に細くなる「直線刃 1 類」（河野 2014a）という類型である。なお、刃先がやや丸みを帯びているため、厳密な意味での直線刃 1 類とは異なる。むしろ背が直線的で刃縁が外湾する「外湾刃 3 類」（河野 2014a）にも近い形状といえるが、刃先はコ字形となり、大枠の形状は短冊形となる点を踏まえると直線刃 1 類と認識して問題なかろう。縦断面を観察すると、楔形となることから両刃である。刃縁を手前にして、折り返しを右に置いた場合に折り返しが表面になる「甲技法」（都出 1967）である。鈍角に基端全体を折り返し、着柄角度は直角といえる。その直角の着柄角度に沿う形で、木柄の装着痕が表裏面に残る。楔は肉眼では確認できない。側面を観察すると、基端から刃先側にかけて直線的だが、刃先付近は裏面側に緩やかに湾曲する。（河野）

#### 4. 考察

**時期** 今回報告した農工具の時期を位置づけてみたい。まず、鉄斧は「短冊形鉄斧」であり、古墳時代では前期から中期前半に限定でき、西日本ではほぼ前期に普及する（古瀬 1991）。次に、茎

部が細長い形状をもつ鉄鉋は、概ね古墳時代前期に類例が多く、中期以降にも認められる。鉄鎌は、形状から「直線刃 1 類」に位置づけられる。この直線刃 1 類は、古墳時代前期から中期にかけて幅広く確認できる（河野 2014a）。

以上のことから、農工具からみると中期まで新しくなる可能性はあるものの、古墳時代前期の範疇でとらえられる。これは玉類に滑石製勾玉が含まれることから安威 0 号墳を前期末～中期初頭と位置づけた従来の見解（廣瀬 2014）とも矛盾しない。

**使用** 農工具には実用品と非実用品とがある。非実用品は前期後半より確認でき、時期区分の指標ともなっている（河野 2014b）。安威 0 号墳出土農工具は、大きさや厚さの面も考慮すると、非実用品とするよりも実用品とみてよい。工具ならば木を削り、農具ならば農作業などに用いる道具であり、祭祀や儀礼専用で作られたものとは考えにくい。

そして、鉄斧・鉄鉋・鉄鎌ともに木柄を装着する。鉄斧 1 では刃縁が斜めであり、刃隅が丸みを帯びている。また、鉄鎌も刃縁側の先端が丸みを帯びている。これらの点から実際に使用された可能性が高いといえるが、一方で鉄鎌の刃先はコ字形ともなっていることから、研ぎ減りがあまり進んでいない製品ともいえる。古墳に副葬される農工具には、使用による研ぎ減りでかなり刃が減っ

ているものがあるが、安威0号墳例は該当しない。むしろ、使用状態からみる限り、まだ農具や工具として使えるものを古墳に副葬していると評価できる。

**階層** 安威0号墳は直径約15mの円墳である(奥井1982)。前期古墳のなかでも墳丘規模や墳丘形状から判断する限りにおいて、比較的低い階層の古墳として位置づけられる。

今回検討した農具をみると、各埋葬施設において短冊形鉄斧を出土していることは特筆するに値する。短冊形鉄斧を分析した古瀬清秀氏によると、大きさにより大形品、中形品、小形品とで分類でき、安威0号墳例はいずれも小形品に相当する。小形品は、大形・中形品を出土する古墳と比べて一般に小規模な古墳で出土することが多い。そして、西日本では円墳からの出土が目立つため、古瀬氏の見解を追認できる(古瀬1974)。また、使用した実用品の鉄鎌を副葬する古墳は、未使用品や非実用品の鉄鎌を副葬する古墳と比べて、墳丘からみた階層は低い傾向にある(河野2014a)。つまり、前期古墳のなかでも低階層の古墳に副葬される農具が出土しており、安威0号墳は墳丘からみても低階層であることから、遺物と遺構のあり方が関連している。なお、低階層とはいっても、銅鏡や石釧等も出土している古墳であるため、最下層の古墳ではなく、ある程度高い地位を持った被葬者像が想定される。まだ使える鉄鎌を副葬するという行為も、葬送儀礼のなかにおけるアイテム選びの余裕のあらわれ、つまり豊かさを反映しているのかもしれない。(河野)

## 5. おわりに

安威0号墳出土品のうち鉄製品を検討して、これまで未報告であった資料を図化・報告した。農具のうち短冊形鉄斧と直刃鎌が出土している点は、安威0号墳が前期末から中期初頭に位置づけられてきた見解を補強する材料となった。これは粘土槨の構造からみた時期とも矛盾しない(清水2016)。また、実用品であり使用した農具が低階層の古墳から出土している現象は、農具と古墳の階層の相関性の議論を追証できる事例として評価できる。

本稿は資料報告が主たる目的であるが、この報告を契機として安威0号墳が再評価され、地域に

おける歴史の再構築に少しでも貢献できることを望む。

脱稿後、現在文化財資料館で進めている収蔵資料の台帳作成の進展により、他の鉄製品の所在が明らかとなった。これらについては、稿をあらためて資料紹介をすることにした。

(河野・清水)

## 参考文献(五十音順)

- 奥井哲秀 1982 「茨木市安威0号墳、1号墳の調査」『大阪文化誌』第15号 財団法人大阪府文化財センター pp. 29-38
- 河野正訓 2014a 『古墳時代の農具研究－鉄製刃先の基礎的検討をもとに－』雄山閣
- 河野正訓 2014b 「古墳時代前期の農工漁具の編年」『前期古墳編年を再考する－広域編年再構築の試み－発表要旨集・資料集』中国四国前方後円墳研究会第17回研究集会 pp. 101-112
- 清水邦彦 2016 「茨木市安威0号墳の粘土槨について」『茨木市立文化財資料館館報』第1号 茨木市立文化財資料館 pp. 5-7
- 都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第4号 考古学研究会 pp. 36-51
- 廣瀬寛 2014 「安威古墳群」『新修 茨木市史』第七巻(史料編 考古) 茨木市 pp. 266-272
- 古瀬清秀 1974 「古墳時代鉄製工具の研究－短冊形鉄斧を中心として－」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会 pp. 31-56
- 古瀬清秀 1991 「農具」『古墳時代の研究』8(古墳Ⅱ 副葬品) 雄山閣 pp. 71-91
- 森浩一 1951 「安威古墳群の問題」『古代学研究』第5号 古代学研究会 p17
- 森田克行 2006 『今城塚と三島古墳群』同成社

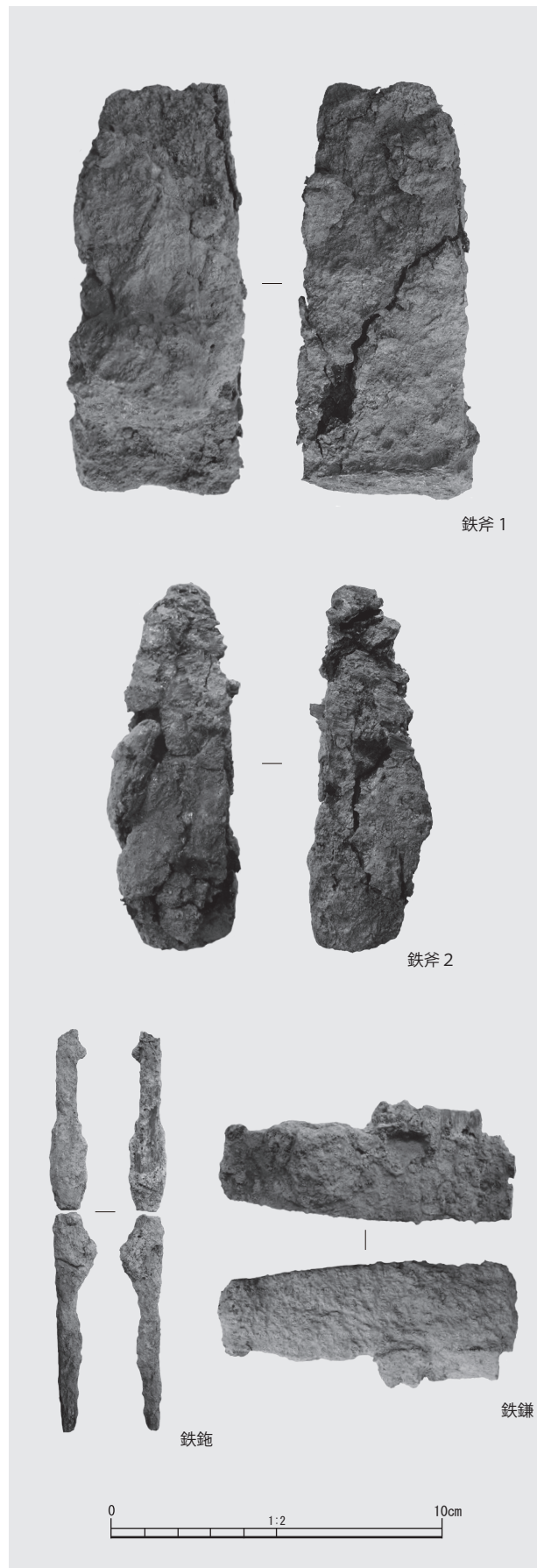


写真1 安威0号墳出土の農工具